

50・新年おめでとうございます (2007.1)

私の所感を読んで頂いている皆様、新年おめでとうございます。

新しい年を迎えて早くも半月が過ぎた、過ぎてしまった。十六日で三八四時間。人が八十まで生きるとすると二万九千二百日、七十万八百時間になる。多いのか少ないのか・・幾らあがいても 誰もが持っている現実だ。多いと感じるか短いと思うか、充実感があるかないかはその人本人がどのように時間を使うかにかかっている。

昔開発設計に関わっていた時、あるいは海外プロジェクトで現地工事の責任者として従事していた。大きな壁、問題にぶつかり、これを全うしなければお客様との約束を果せない、自分の責任を果せないという重圧の日夜が続いたことがあった。

こんな時、もし神様が居て「もし、お前の寿命を一年縮めていいならば、この問題を解決してやろう、重圧を取り除いてやろうじゃないか」と提案されたら、是非そう願いたい！ と何度も神頼みしたことを思い出す。しかし苦し紛れにフト思うだけで、現実が悪戦苦闘をして何とか全ての問題を解決してきた。もしあの時、一年という時間を売っていたら、今頃私は後悔しているに違いない。時間は人生であり、その可能性そのものです。

私にはあと約五千五百日、十三万二千時間残っている。

時間は限られたもの、大切なものだという認識を新たにして今年もスタートしたいと思います。

51・現実と空想 (2007.1)

「やあ！ 大変ご無沙汰しております、お元気ですか？ 一月九日に横浜方面に年頭の挨拶回りに行きますので、もし宜しければ夕方お会い出来ませんか？ 昔私を育ててくれた田村さんには是非お会いしたく思います。が・・」 何年ぶりだろう・・ 思い掛けない泣ける電話が正月四日に入った。彼は昔取引のあった私とは別会社勤務で私より約二回りも若い四十二歳の現役だ。それにしても卒業五年も経った私を思い出してくれたとは何とうれしい事だろう。

私のバスが早く着いたことと彼の年始回りが少し手間取ったことで、私は横浜そごう入口にある世界人形時計から流れるチャイム（イツスマールワールド）を二回も聴いたが、毎回大勢の人が時計を見ながら聴き入り、なかには音楽に合わせて一人ステップを踏んでいる中年の女性もいた。多分身体が自然に動いてしまうのだろう。

あのデイズニールランドの曲を聴きながらのこの情景は、世の中何と平和なんだろうと、この時ばかりは日頃の新聞記事を忘れてしまった。

彼はビールを一口も飲めないとの事でウーロン茶、私はやはりアルコールがないと物足りない。現役の頃は仕事の話や世間話が多かったが、その夜はお互いの

生い立ちから趣味、人生観、将来設計などいろいろであった。それにしても彼から私が在籍した会社の人名がどんどん出てくるのには驚いた、彼もこの二十年、仕事に徹していたに違いない。

ふと気が付くと十時過ぎ、何と四時間以上も話していたことになる。久しぶりの彼は、やはり現役というエネルギーを感じ、また以前より貫禄がついており、大分先輩の私としても頼もしく思えうれしくなった。現実問題として、私の年金はまさしく彼らの肩にかかっているのだ！

彼との待ち合わせの間、ホールを見渡すときれいな自動販売機が二台並んで見えた。一台のほうに何やらテレビのような物がついているので興味津々、近づいてみるとTV番組では無さそうだが動画でいろいろやっている、最近是这样になっているのかと少しビックリ。

隣の販売機も少しおかしい？何か付いている・良く見ると携帯電話をかざすと課金処理されて飲み物が出てくる仕掛けらしい、これにはビックリした。

帰宅後早速インターネットで調べてみると、ドコモのおサイフケータイを専用の読み取り端末にかざすだけで、サインレスで買物が出るものらしい。支払いも事前の現金チャージをする必要もなく後払い（ポストペイ）で買えるとの事だ。ウーン、私は初めて見た。

現役卒業以来あまり出歩かない私はついに横浜の田舎者になってしまったか。今やケータイは電話、メールだけではなくTVやカメラ、地図さらには自動販売機のサイフ代わりにまで進歩を遂げた。ケータイ万能の時代か？私が現役の頃は電話使用しかしていなかったことを思うと実に感慨深い。

先日、あるメルマガに国際マンガ大賞のことが載っており早速開いてみた。その一つに、三途の川の前にケータイがいっぱい捨てられて山になっているのがあった。橋の上には「ここより 圏外」と立て看板がある。ウーン面白い、現代的なブラックユーモアだ！・これに喚起され次のようなことを空想してしまった。

あの世には現世よりすばらしい通信システムがあり「いつでも どこでも だれとでも」を実現している。しかし、現世のシステムと接続する技術が無い。一方この世も今や事業者が違っても、海外とも国際ローミングできる技術が確立している。問題は現世の技術者と来世の技術者がシステムの接続技術、ローミングの技術打ち合わせが出来ないことである。以前、あの世に行きかけた人が橋の途中まで行き又この世に戻ってきたという話を聞いたことがあるが、出来れば橋の上で両技術者が技術打ち合わせをし、成果を持ち帰り、各々の通信システムのローミング機能をバージョンアップすれば良いのでは？はたしてこんな開発設計は可能だろうか、ケータイ万能でもやはり無理だろうか？

私が若い頃にあちらに行ってしまった母とケータイで話してみたいものだ・・・年初の初空想でした。

君がため春の野に出て若菜摘む、

わが衣手にゆきはふりつつ。(光孝天皇)

百人一首に出てくるこの歌をなぜか良く覚えている。子供の頃、家に百人一首があつたことと、若い頃歌を全部覚えようと本を買ったことを思い出す。結局途中で放り投げてしまったがあれから数十年、若菜とは春の七草だということは今年あらためて知った。

昔は温室やビニールハウスは無かつたと思うので、野菜不足になりがちな冬には野原で若菜を摘んで食べ、風邪を引かないよう、達者で冬を越したいということとだつたらしい。平安時代の頃より始まつたらしいが、冬場でも野菜が何でも手に入る現代も、この「春の七草」の慣習は脈々と伝わっている。何か心温まる懐かしさを感じる行事だ。

昔、表日本でも雪が多かつたと思うので、雪降りの中で、あるいは積もつた雪を掻き分けながら若菜をつんだので、このような歌が出来たのでしよう。私の生まれ育つた裏日本、積雪ニメートルの雪国では決して生まれぬ歌だと思ふ。でも近年、特に今年の関東は雪の気配がまったくなくなつた。時代は変わった? いや地球は変わったが正解にちがいない。昨年、昔から七草を栽培、出荷している町内の農家と縁あつて知り合いになることが出来た。

二十四年前に百二十坪のビニールハウスを作つたのがきっかけとなり、仲間十人でスタートしたとのこと、当初は全員で五千パック出荷するのに大変だつたとのことである。長い間に仲間も撤退し、四年前からは三戸の農家で三十三万パックを出荷しているそうである。

全国的に産地も増える中で神奈川産の七草は品物が良いということで現在に至っているらしい。

出荷作業記録DVDの作成を依頼され、今まであまり縁のなかつた春の七草と向き合つた年末年始、感動の二週間でした。



53. 今まで考えもしなかった体験 (2007.3)

この三月、車で十五〜二十分の所に巨大なショッピングスポットが出現した。総店舗面積二千八百坪、三百八十の専門店。駐車場四千二百台、駐輪場二千十台は平日無料(車社会の昨今これはありがたい)。

十三スクリーン、二千四百席の神奈川県最大級のシネマコンプレックスもあり、私が行ったプレオープン初日は買い物、食事などで大盛況。映画はオープニングイベントとして五百円のスクリーンが多かった。

でも映画ファンの私としてはアカデミー主演男優賞を受けた俳優の演技をどうしても見たかったので、迷わず「ラストキング・オブ・スコットランド」のチケットを購入、もちろんシニアの特権を生かして千円(身分証明書の提示を求められた)

何の予備知識もなく観たが、ウガンダの元大統領 イデイ・アミンを描いた映画だった。彼の無邪気な明るさ、残酷さの二面性を俳優が見事に表現しており、何か観る者をハラハラした気分させるあたりはなかなかの出来だと思ふ。

午後四時のチケットであったが五分前に着席・誰も入っていない。近日上映の予告も終わり本編スタート・でも他に誰も入ってこない。

約二時間の映画もついに終わり、最後のエンドロールと余韻を残す音楽が流れる・一人入ってきたと思ったら、場内係員が私達夫婦一組をそれとなく確認し直ぐに出て行った。せつかくの珍しい体験だからとエンドロールの最後までじーと音楽を聴いてしまったが、あの大きな劇場の真ん中で二人だけの映画、これは人生の中で多分後にも先にもこれだけだと思ふ。チョットした感動であった。

こんな状態が起こる確率ほどの程度なのだろうか・これは何かの予兆かも、その気になって宝クジを買った。

54・三十九年の命だった (2007.3)

0840(おはよう)、724106(何してる?)、14106(愛している)・・・これはそれ程でもない昔、「ベル友」ブームを起こした女子高生の電文だが、ポケットベルが高校生を中心とした若年層のコミュニケーションツールとして爆発的な人気になったことは周知のとおりだ。各界のサラリーマンもいつもベルトに付いたり、寝るときは枕元、夜中や休日にも急に「ピーピー」と呼び出された人が多いと思う。

初めての超便利なパーソナル移動通信として誕生し、1990年の最盛期には千七十八万という加入者だったポケベルが、いよいよ、あと一週間(三月末)で三十九年の歴史に幕を引く。開発メンバーの一人であったので、やはり感慨深いものがある。

電電公社(NTTの前身)から指名を受け、開発を始めたのが昭和三十八(1963)年、当時は形状も大きくワイシャツの胸ポケットにねじ込んでみてもまだ相当

出っ張る大きさだった。ようやく実験機が完成し各社の受信感度テストを実施するのお達しにより、実験機を大切にカバンに入れて神妙な顔で公社ビル屋上に向いた、他社と性能比較テストをするのは初めのこと、この他流試合にはやはり相当緊張した。

今にも雪が降りそうな寒い日だったが、自社のポケットベルを胸ポケットに入れ屋上に二メートル間隔で一列に並びテスト開始。最初は電界強度が強くなるように基地局から送信するのほとんど全ての機器が電波を受信し、ピーピーと甲高い呼び出し音を発し和やかな雰囲気であった。しかし徐々に電界強度を下げてくると鳴る、鳴らないとバラツキが出てくるようになり皆の眼差しが一際真剣になった。勿論このテストだけで合否が決まるわけではなく、相互比較をすることによりお互いの長所短所を自覚し、さらなる性能アップに皆で取り組むためのテストだが、やはり新システムの技術コンテストである。全員寒いことも忘れて長時間屋上でがんばった。

その後、東京タワーからの電波がどの程度実用になるかを実測することになり、測定器とアンテナ、巻尺を持って都内のビル街、電車の中、地下街、デパート等をくまなく測定して回った。ビルの中では窓からの距離を測定しながら屋内における電波の浸透、壁による減衰など細かいデータを真剣に集めた。

そして、昭和四十三(1968)年に東京二十三区でサービス開始、当初の使用料は月二千円、その他に呼び出しの度数料、ちなみに当時の大卒初任給は約二万円だった。ポケットベルからパーソナル移動通信のお株を引き継いだ「ケータイ」が、歴史の幕を引くことなどは想像も出来ないが、現在日進月歩でハードウェア、ソフトウェアともに変身、前進を続けている。自動車電話の変身であるショルダーホン(肩掛け携帯)が世に出たのが1986年、三十九年後の2025年頃パーソナル移動通信はどうなっているのだろう・・・とんでもない事になっているかも・・・。